

# 『今月の天候と農作業』

通巻第5540号  
2月号  
平成24年2月3日発行  
宮崎県  
宮崎地方気象台



## 【九州南部1か月予報】

向こう1か月の気温、降水量及び日照時間の各階級の予想される確率は次の通りです。

## 【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	40	40	20
降水量	九州南部	30	40	30
日照時間	九州南部	30	40	30

## 【概要】

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、平年並または低い確率ともに40%です。

＜1週目の予報＞ 2月4日(土)～2月10日(金)

天気は、4日と期間の後半は東シナ海側では寒気の影響で雲が広がりやすく、太平洋側では晴れる日が多いでしょう。その他の日は気圧の谷の影響で曇りや雨となるでしょう。(詳しくは週間天気予報をご利用ください。)

気温は、低い確率50%です。

＜2週目の予報＞ 2月11日(土)～2月17日(金)

天気は、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

＜3週目から4週目の予報＞ 2月18日(土)～3月2日(金)

天気は、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

気温は、平年並または低い確率ともに40%です。

## 普通作物

### ◆ 早期水稲

---

昨年同様降水量が少ないため、場所によっては田植えができず育苗期間が長くなることも予想されますので、基本管理をしっかり行い、苗の徒長や病害発生に十分注意しましょう。

#### 1 播種までの管理

種子消毒の際、種粉に気泡が付いていると、消毒効果が低下します。消毒液に種粉を浸すときは、粉袋を細かく揺すりながら気泡が付かないように沈めます。その後、催芽を揃えるため水温20度以下で十分な浸種期間を確保します。

浸種期間の目安として、水温10度で10日間、15度では7日間程度とし、20度を上回る水温では、発芽ムラ等を助長しますので注意しましょう。なお、浸種期間中は2～3日に1回水の入替えを行います。

浸種後は、30～32度の温湯で24時間浸種し、わずかに芽がのぞく程度（ハト胸状態）に催芽し播種しましょう。

#### 2 播種

厚播きは徒長苗になりやすいので禁物です。育苗箱に2割の深さで床土を入れ、稚苗の場合は催芽粉で180g程度均一に播種し、「苗立ち枯れ病」等の防除を兼ねて、指定された倍率で薬剤をかん水し、粉が隠れる程度に覆土します。

#### 3 播種後の育苗管理

播種後は、28～30度を保ち2日ほどで出芽を揃えます。この時に32度を越えるとリゾープス菌（クモノスカビ）が発生しやすくなりますので注意しましょう。

出芽長が、5～10mm程度に揃ったら緑化に移し遮光します。この期間に高温による苗の徒長や急激な温度低下によるムレ苗及び苗立ち枯れが発生しますので、かん水は午前中に行い、温度は昼間は25度以下に、夜間は15度以上保つよう管理しましょう。

#### 4 追肥

中苗や成苗は、播種後20日目と30日目頃に液肥を施用します。液肥は硫安の場合、1回1箱当り3gを500mlの水に溶かして散布します。これでチッ素成分で一箱0.6g

になります。液肥を散布した後は、かん水して葉焼けを防ぎます。

## ◆ 麦類

---

### 1 踏圧(麦踏み)

降水量が少ないこと等で、葉齢の進みや莖数確保など生育は遅れています。分けつの促進を図るため、踏圧を2月中旬までに行いましょう。

### 2 土寄せ

条播きの場合は、分けつ調整と雑草防除のため土寄せを実施しましょう。

### 3 排水対策

麦は、湿害に弱い作物です。特に全面全層播栽培（ばら播き）などでは、3畝間隔で作溝を行い排水対策に努めましょう。

### 4 追肥

穂肥については、2月中旬までに10畝当たり窒素成分で2.5<sup>kg</sup>、加里で2<sup>kg</sup>程度施用しましょう。

( 鎌田 博人)

## 施設野菜

### ◆ 共通事項

---

中旬までは気温が低く、日射量も少ないため、午前中の温度確保と、内張カーテンの開放による光線確保により光合成を促進しますが、下旬になると、日射量も徐々に多くなり、最低気温も10度以上となる日も出てきます。加温機の稼働時間も短くなり、ハウス内湿度の上昇に伴う病害の発生が多くなりますので、夜温の高い日は内張カーテンの調節により、適度に加温機が稼働するようにします。

また、収穫までの日数も短くなり、着果量も増えてきますので、追肥とかん水量を増やしていきませんが、1回の量を増やさず、かん水間隔を短くするなど、極端に栽培環境を変えないよう、こまめな管理を心掛けましょう。

### ◆きゅうり

---

ハウス内の温度管理は、午前中28～30度、午後23～25度、夜間12～14度とします。

促成のつる下ろし栽培では、「芯止まり」になりやすいので、開花や収穫果の位置（生長点から3～4節目で開花、10節前後で収穫できるのが理想）に注意します。開花節位が上がった場合には、強めの摘果を行うとともにかん水量を増やして、草勢維持に努めます。

### ◆ピーマン

---

受光態勢をよくするため下位節の徒長枝を摘除するとともに、中位節以降の側枝が伸びたものは2～3節で摘心し、下位節まで光が当たるようにします。ハウス内の温度は、午前中28度、午後は徐々に温度を下げ夕方25度、夜間18度とします。

### ◆トマト

---

果実肥大と着色促進及び食味向上のためには、日射量の確保と葉数確保が必要となりますので、日中の内張カーテンの開放と15～18枚程度の葉を確保します。下旬以降は、着色までの日数も徐々に短くなり、着果数も増えてくるため、かん水量を増やして草勢維持に努めます。

### ◆いちご

---

いちごは、曇天が続くと成熟に要する温度が確保できず、成熟期間が長くなり、裂果等の品質低下が懸念されます。ハウス内の温度は、午前中25～28度、午後20～25度、夜間5～8度とします。

曇天が続き、日中温度が上がらない場合には、着色促進のため夜温をやや高めに管理しますが、8度を上限とします。また、大玉果、食味向上のため1株当たり10果前後に摘果します。

（郡司 孝幸）

## 葉茎根菜類・いも類

### ◆トンネル内の適正な温度管理

---

気温が低い時期なのでトンネル栽培では温度確保に努めますが、晴天日の日中は高温になり、換気の必要な場合があります。レタスやスイートコーン、かんしょ、ニンジン等トンネル栽培については開閉管理を徹底し適温管理に努めましょう。

### ◆スイートコーン

---

大型、小型トンネル栽培の播種適期となります。スイートコーンは発芽と生育の適温域が大きく異なる品目です。発芽は30～35度で管理することになります。発芽後は22～30度を目標に換気します。

### ◆レタス

---

生育適温は15度～20度です。高温管理は葉がよじれたり変形球になりやすく、寒害を受けやすくなりますので、日中は十分な換気を行ってください。

### ◆食用かんしょ

---

今月から来月にかけてトンネル栽培の挿苗時期となります。採苗前は外気温にならしながら適温で管理し、苗の徒長を防ぎます。採苗は挿苗予定の数日前の午後に行います。また、挿苗時には十分な地温が確保されている状態が理想ですので、トンネルは前日から密閉し地温確保（18度以上）に努めます。条件が悪いほど活着が遅れ、塊根の着生数が減りやすくなるので、適正な管理を行い初期生育を促します。

### ◆さといも

---

早生種の定植期になります。連作障害が出やすいので連作は避けます。また、栽培ほ場はセンチュウ消毒を行います。健全な種芋（30～50g程度）を選別し、センチュウや乾腐病の消毒を行って定植します。

### ◆畦立てマルチについて

---

これから播種・植付けする品目の発芽・活着促進は、地

温と土壤水分を確保することが大切です。マルチングする時は、ほ場の土を片手で握ってみて団子になる程度を目安とします。逆に手が濡れるようなら過剰ですので適湿になるのを待って耕起します。

(河野 健次郎)

## 果樹

### 1 常緑果樹

---

#### ◆完熟きんかん

完熟きんかんの出荷が最盛期を迎えます。これからは暖かくなり、過熟やウルミ果の発生が懸念されますので、ハウス内の温度管理に気を付けましょう。昼間は10～15度を保ち、夜間は凍害に遭わないように注意しましょう。

収穫は、果実の着色程度や熟度に合わせた収穫を行いましょう。また、きんかんの果実は衝撃に弱いので、収穫・選果・選別は丁寧に行いましょう。

#### ◆マンゴー

赤い色の割合が多いほど、高品質の果実とされ、大玉ほど高単価で取引されます。このために重要となるのが、早期摘果と幼果期からの日照確保です。今年は、花芽分化が不十分なため、結果にばらつきのある園地が見られます。摘果の際は、極端な早期摘果を避け、果実の縦径が3割程度になったのを確認してから行いましょう。その後は、果実を吊り上げて、光が十分に当たるようにしましょう。果実が5割程度になったら、結果枝2～3本当たり1果に結果数を調整しましょう。

また、開花直後のアザミウマ類の発生は果実品質を大きく低下させます。発生に注意し、ハチを出した後はすぐに防除を実施しましょう。毎年カイガラムシの発生が見られる園では発生に注意し、早めに防除を行いましょう。

### 2 果樹園共通

---

#### ◆土壌改良

果樹栽培において高品質と高収量を得るためには、土壌の通気性と排水性の確保が重要です。たい肥や稲ワラなどの有機物を施用し、土壌改良を行いましょう。また、土壌の

酸性化や塩基バランスの崩れは、養分の吸収や根の生育を阻害します。土壌診断を行い、石灰・苦土資材を適正に施用しましょう。

(山口 和典)

## 花き

### ◆電照ギク

---

2～3月出荷の作型は最も暖房コストがかかります。それぞれの品種、系統に適した温度管理でコスト削減に努めてください。低温が続いていますので、低温開花性でない品種は昼夜温の確保に特に注意してください。施設の多層被覆によりハウス内の湿度が高まる時間帯が長くなります。換気による除湿や定期的な予防散布などを行い、病害防除に努めてください。「神馬2号」、「神馬66-4」の3～4月出荷作型の再電照開始は総苞りん片形成後期から3～4日間実施します。開始時期の決定は、最寄りの農業改良普及センターやJAに相談し、「花芽分化の調査検鏡」を行った上で決定してください。

### ◆スイートピー

---

12月以降、晴天が続いており、安定して出荷したほ場では草勢の低下が心配されます。タイミングを逃さず草勢に応じたかん水及び施肥管理を行ってください。液肥を施用する場合は濃度の高い液肥は根に障害を起こしますので、低い濃度で使用してください。「花シミ」も発生しやすい条件になってきますので、換気に努めるほか、循環扇等でハウス内の空気を動かして水滴の付着を防ぐなど「花シミ」の軽減を図ってください。また、定期的な生物農薬のダクト散布も灰色かび病対策に有効です。

### ◆ホオズキ

---

7月出荷は2月上旬までの植え付け、8月出荷は中旬からの植え付けになります。土壌消毒を必ず実施し、ネコブセンチュウや白絹病などほ場に持ち込まないように、十分に注意してランナーの選別・調整を行い、必要に応じてランナーを消毒してください。萌芽時には、ほ場をこまめに巡回し、マルチに穴を開け、成長点の焼けを防いでください。

## ◆デルフィニウム

---

沿海地域では2番花の収穫期から3番花の萌芽期になります。ボリュームを確保するため、適正な仕立て本数に整枝してください。中山間地域のロゼット打破作型では2番花の発蕾から花穂伸長期になります。極端な低温管理を行うと需要期の3月の出荷に間に合わなくなりますので、成長に応じた適正な温度管理を行ってください。

## ◆トルコギキョウ

---

特に八重系のブラスチングや成長点の障害が心配されます。適正な温度管理に加え、不要枝、蕾の摘除、カルシウム剤等の葉面散布で発生の軽減を図ってください。

## ◆ラナンキュラス

---

1月後半から収穫量が増加していますので、草勢が低下しないように150ppm程度の濃度の液肥を適宜施用してください。

(中村 広)

### 畜産・飼料作物

今月は「家畜防疫強化月間」です。この時期は空気が乾燥し、様々なウイルスや細菌が活発に動くようになります。また家畜が寒冷ストレスを受けるため、病気が発生しやすくなります。農場に病気を侵入させないことが大切ですので、車両、人及び物の出入りには注意を払うとともに、消毒槽の適正管理など日常の衛生管理に努めましょう。

## ◆鳥インフルエンザ対策

---

昨年、本県で発生した高病原性鳥インフルエンザの被害は記憶に新しいところです。アジア諸国においては発生が続いており、いつ国内に侵入してもおかしくない状況にあります。鶏舎や農場内の石灰消毒はもとより、以下のことにも十分注意してください。①長靴は鶏舎ごとに履き替える。②防鳥ネットは2センチ以下の網目にし、野鳥や野生動物の侵入を防ぐ。③鶏舎の壁や穴はコンパネなどで補修する。④殺鼠剤や粘着シートを使いネズミを駆除する。⑤家禽の飲み水は塩素剤等で消毒する。



## ◆口蹄疫対策

---

中国や台湾では口蹄疫の発生が続いています。今一度、家畜防疫の徹底を行いましょ。口蹄疫の症状は元氣消失、食欲減退、著しいよだれ・鼻水、口腔や蹄、乳房等の水疱などです。口蹄疫は空気感染し伝播性が非常に強いため、異常が見られたらすぐ獣医師に相談しましょ。防疫対策として以下のことを徹底しましょ。①農場専用の衣服、長靴を使用する。②踏み込み消毒槽を常に設置し、汚れたら消毒液を交換する。農場の出入りの際には必ず消毒をする。（家畜の集まる場所に行った場合は特に念入りに）③関係者以外は農場に入れない。④導入した家畜はしばらくの間は他の家畜から離し観察する。⑤日々の家畜の観察を十分行う。

家畜は大事な財産です。自分の財産は自分で守るということ念頭に、家畜防疫対策に万全を期しましょ。

来月になりますと、トウモロコシ等の春夏飼料作物の作付けが始まります。輸入飼料の価格は今後も高止まりが予想されるため、経営の安定化のためにも、自給飼料の確保に努めましょ。昨年、収量が少なかったほ場やリン酸含量が少ないほ場については、事前に土壌診断を実施し適切な施肥ができるようにしましょ。

（須崎 哲也）

## 特用作物

### ◆茶

---

#### 1 春肥の施用

春肥は一番茶をはじめ、二・三番茶の収量品質の向上に大切な肥料で、2月中旬～3月上旬を目安に施用します。

肥料は地区の基準に準じ、うね間全面に幅広く散布します。施肥後は根を傷めない程度に、軽く攪拌しましょ。

#### 2 春の整枝

春整枝時期は平均気温10度が目安です。平坦地では2月下旬、山間地では3月上～中旬頃を目安に、葉層を8割確保した上で、最終摘採位置から3～5割の高さで行います。整枝直後は急激な低温に当たらないよう注意してください。秋整

枝した園では越冬芽にかからない高さで丁寧に整枝してください。また、萌芽15日前からは防霜対策が必要です。

摘採期の集中を避けるため、品種の早晩の他、地域の微気象や秋・春整枝の早晩性等を考慮して、整枝時期を調整し、適期摘採を心掛けてください。

### 3 カンザワハダニの防除と機械の点検・整備

カンザワハダニの防除時期は、産卵開始時期の2月下旬～3月上旬頃の春整枝後になります。

地区の暦に準じ、裾部や葉裏に十分かかるよう散布してください。

また、異物混入防止や品質向上のため、茶工場内の清掃を行うとともに、防霜施設や製茶機械の事前点検・整備・調整を早めに行いましょう。

(岩切 健二)

## ◆しいたけ

---

### 1 植菌と仮伏せ

植菌時期が遅れると害菌の付着が多くなりますので、暖地では遅くとも2月下旬までには終わらせましょう。

仮伏せは、植菌した種駒の乾燥を防ぎ初期活着を促進する作業で、シイタケ菌糸の活着に必要な温度と湿度を保つ必要があります。仮伏せには、排水や日当たりの良い場所に縦囲いする方法と、地際から40センチ以下の高さに横積みする方法とがあり、本県では横積法が多く使われています。それぞれほだ木の周囲を笠木や遮光ネット等で風が当たらないように被覆し、上面は雨が良く通り、かつ日陰ができるようにして保温・保湿を図りましょう。

### 2 寒子づくり

袋掛けやビニール被覆を行い、保温・保湿を図り、良質なシイタケの生産に努めましょう。

### 3 採取

発生したシイタケは、目標の品柄に応じて若干早めに採取するなど、品質の向上に努めます。特にほだ木の表面を傷めないように、しかもヒダに触れないように丁寧に採取しましょう。

採取後は速やかに乾燥し、湿気が入らないようにポリ袋な

どで密封し、箱に入れて冷暗所で貯蔵しましょう。

(田中 貴司)

## ◆葉たばこ

---

今月は、仮植と苗床管理が主な作業となります。苗の良否が、本畑以降の生育に大きく影響します。健苗育成に努めましょう。

- ① 苗床肥土は排水・通気性の良い完熟の物を使用しましょう。

苗の仮植は葉数5枚苗（米粒大まで）を使用し、かん水は、根が活着するまでは床面が乾燥しすぎない程度に行いましょう。

活着後は、夕方に床面が少し乾く程度にかん水し、かん水過多による病害や根腐れに注意します。ハウス内は、高温にならないよう、20～25度を目安に換気を行しましょう。

本畑移植7～10日前からは、順化のために苗の生育に応じて換気とかん水制限を行いましょう。

- ② 畦立は、練畦防止のため土壌水分に注意して行ないましょう。また、根張り促進のための地積確保と排水対策も含めて30％以上の高畦にしましょう。

被覆は早作早進のため透明マルチを原則とし、PVY対策等、必要に応じてシルバーマルチ等を活用しましょう。

- ③ 春消毒や苗床での農薬使用は、使用基準に沿って最善の注意をはらいましょう。

(中矢 恭輔)

### 内容の詳細について

2月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県営農支援課及び環境森林課、日本たばこ産業南九州原料本部が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://mawi.sakura.ne.jp/>)

## なになに農業アラカルト

### 「活躍しています！農村女性アドバイザー」

---

#### ●宮崎県農村女性アドバイザーについて

宮崎県では、農業・農村の重要な担い手である女性農業者の経営参画や社会参画を促進するため、女性農業者のリーダー育成・支援を行っています。

平成5年度から設置した「農村女性指導士」認定制度により、これまでに、延べ772名（実認定数累計489名）をリーダーとして知事認定しています。

平成21年度からは「農村女性アドバイザー」に名称を変更し、役割等を見直しました。現在、第6期目の認定となる99名が県内で積極的に活動されています。

#### ●農村女性アドバイザーの役割

- ① 家族経営協定や農業経営改善計画の共同申請等の経営参画の推進
- ② 地域農政の方針決定等の社会参画の推進
- ③ 農業後継者を含む新規就農者の育成・支援
- ④ 集落営農の経営多角化やむらづくり活動等の推進
- ⑤ その他農村女性に関する活動促進

#### ●農村女性アドバイザーによる次世代担い手の育成

農業後継者の中でも若手女性農業者の場合は、非農家出身で、農家の後継者との結婚後に初めて農業・農家に関わるケースが多く、さらに各個人により就農時期が様々であるため、地域内で確認しにくい存在です。

そこで、近年、農村女性アドバイザーは関係機関等と連携し、そのような若手女性農業者への支援活動を増やしています。

例えば、若手女性農業者の実態やニーズの調査を行ったり、自らの経験をふまえた学修カリキュラムを作成しセミナーを開催する等、様々な内容に取り組んでいます。

時には、楽しく和やかな雰囲気づくりのため、手作り料理によるランチ・ミーティング形式を取り入れるなど女性ならではの工夫もみられます。

若手女性農業者にとって、農村女性アドバイザーなどの身

近な先輩からの参加勧誘は意欲を高めやすく、農家経営に関する経験談や助言も理解しやすく効果的なようです。

農村女性アドバイザーは、この他にも多様な地域活動を実施しており、今後も充実した活動実践が期待されていますが、周囲のバックアップが不可欠ですので、御協力をよろしくお願ひします。

(青山 恵子)



## 向こう1か月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

農作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
施設野菜類	病害全般	—	多発してからでは防除効果が劣るので、初期防除を徹底します。特にコスト低減のため多層被覆にしているところでは、換気が悪く病害の発生が助長される傾向があるので注意します。
冬春きゅうり	べと病 うどんこ病 灰色かび病 褐斑病 つる枯病	やや少 やや少 やや多 やや少 並	うどんこ病は乾燥した条件下で、その他の病気は多湿条件下で発生しやすいので、適正な温度・水管理に努めます。また、罹病葉は重要な感染源となるので、適宜除去し園外に持ち出します。 つる枯病は、発病前からの薬剤散布による予防に重点をおくとともに、カルシウム欠乏等によるカッピング症状ができれば、本病が葉縁から侵入し、発病しやすくなるので早めに防除します。
	黄化えそ病 (MYSV) ミナミキイロアザミウマ	— やや多	感染株を確認した場合は、速やかに罹病株を抜き取り、ビニール袋等に入れて完全に枯れるまで密封処理します。 また、黄化えそ病を媒介するミナミキイロアザミウマは、発生初期に防除するとともに、卵と蛹には薬剤がかかりにくいので、7日間隔で3回の連続した防除を行います。
	タバココナジラミ類	並	本虫は低密度でも退緑黄化病を媒介します。また、効果のある薬剤が少ないため、早期発見・早期防除に努めます。
	病害虫全般 (改植時の留意点)	—	ウイルス病を媒介するコナジラミ類やミナミキイロアザミウマに対しては、前作のきゅうりを抜根する前の防除を徹底するとともに、抜根後は20日間以上蒸し込みます。 また、前作に褐斑病などの発生があった場合は、後作きゅうりの定植後直ちに予防防除し感染を防ぎます。
冬春ピーマン	斑点病 うどんこ病 黒枯病	やや多 並 前年、前々 年より多い	斑点病の発生がやや多い状況です。多湿条件で発生しやすいので、ハウス内の適正な温湿度管理、排水対策等を徹底します。 いずれの病害も、罹病葉等は重要な感染源となるので、適宜除去し園外に持ち出します。
	アザミウマ類	並	今後暖かくなるにつれて増加する恐れがありますので、発生が多いところでは7日間隔で3回の連続的な薬剤散布を行い、防除を徹底します。
冬春トマト	葉かび病 灰色かび病	並 並	いずれの病害も多湿条件で発生しやすいので、施設内が多湿にならないようハウスの換気に努め、曇雨天が続く時は日中でも暖房機の送風を稼働させるなど除湿に努めます。 灰色かび病は薬剤耐性菌が出現しやすいので、同一系統薬剤の連用は避けます。
	タバココナジラミ類 トマト黄化葉巻 病 (TYLCV)	並 前年、前々 年より多い	ウイルスを媒介するタバココナジラミ類の発生は平年並ですが、施設内には黄色粘着トラップ等を設置し、媒介虫の早期発見・防除を徹底します。また発病株は根ごと抜き取り、適切に処理します。
冬春いちご	うどんこ病 炭疽病	並 やや多	うどんこ病は、多発すると防除効果が低くなるので予防に重点をおき、発病後は散布間隔を短くする等発生初期の防除を徹底します。 炭疽病を確認したときには、直ちに根ごと抜き取り適切に処理します。
	アブラムシ類 ハダニ類	並 並	寄生数が増加してからの防除は難しくなるので、低密度時に防除を徹底します。特にハダニ類は、薬剤感受性が低下しやすいので同一系統薬剤の連用は避けます。また、地域により薬剤感受性が低いオンシツコナジラミの発生が確認されています。
	コナジラミ類	—	

- 1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるかを予測したものです。  
2) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、<http://www.jppn.ne.jp/miyazaki> です。